

まんだら通信

平成20年(2008)03月 佛誕2574年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天香山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
URL <http://www.awa.or.jp/home/ryusho/>
E-mail ryusho@awa.or.jp

龍祐の伝法灌頂

大正大学の3年生で孫弟子の龍祐が、この度総本山智積院で行われている伝法灌頂を受けて、目出度く阿闍梨さんになりました。

伝法灌頂とは普段聞きなれない言葉ですが、これを受けないと、住職の資格やお葬式の導師その他何も出来ませんので、真言宗の数ある修行の段階のうちで最も大事な儀式ということが出来ます。

真言宗で一番大事な『大日経』に「信仰心篤く、仏法僧を敬い、深い仏の智慧で身を飾り、良く逆境に耐え、戒律を守り物惜しみすることなく、世を救う心が固いこと。」が、伝法灌頂を受けるためには何より大事であると記されています。

そうはいっても、お坊さんの世界もこの頃の世間同様、諸事軟らかくなってきたてはいますが、世のため人のため、という役どころが軽くなつたわけでは決してありませんので、これからも益々学問や修行に励んでもらいたいと、ジイとしてはひたすら願っています。厳かで大事な儀式の邪魔になるかと



焚くほどの風がもてくる落ち葉かな

子供のころから好きな良寛さんの俳句です。生活するぐらゐの落ち葉は風が運んでくれるという意味合いです。日本人は「貧乏がいかほどのものか」を達観して清貧の生活に徹すれば、それはそれで意味のある立派な生活だという哲学を感じます。

いう遠慮もあつたのですが、一生に一度のことですので、是非写真に撮りたいとご本山にお願ひしたところ、そういうことならと特別のお許しを得て写したのがこの写真です。

『江戸の経世済民』

日下 公人さん

日本は世界の最先進国である。過去の実績を見ても、未来を切り拓くいまの底力を

アメリカを中心とした欧米社会は、いまなお弱肉強食の社会観や人間観で突き動かされ、まさに戦国時代を生きています。

はつきり言えば、アラブやアジアに負けない金持ちになりたいと思つて邁進し、現実には誰が見ても金持ちになつたにもかかわらず、まだ足りないと言つて無制限に富を求め続けている。勝つためには略奪しようが、自分以外がどうなるかが知つたことではないという野蛮な考え方で、無間地獄へまっしぐらに突き進んでいる。その典型が、唯一先進国の中で京都議定書を離脱したアメリカです。

日本人はそんな野蛮な戦国時代を、いまから四百年以上も前に逸早く卒業し、世界に類を見ない平和で豊かな社会をつくつてきました。いま循環型社会システムが世界中で問われていますが、日本では江戸時代にその実現を成し遂げていたわけでは

特に戦中・戦後のどん底体験をしている私たちの世代は、当時を思えばたいていのことは我慢できます。原油価格が高騰したなら、落ち葉のたくさんある田舎に住めばいいわけです。

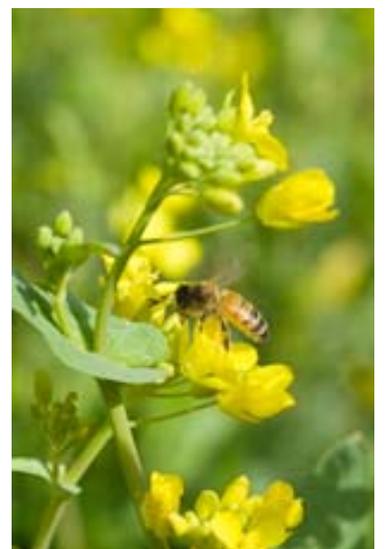
収入が落ちて生活が厳しくなつたという声があちこちで聞かれます。そんなときは、もし収入が三割減つたら、支出のほうで何を削るか書き出してみればいい。二、三日後にもう一度書き出してみる。それを三、四回繰り返しますと、三割減つたつてどうつてことないという気分になるから不思議です。そんなことを講演会などで話すことがあります。

私の講演会には中小企業の経営者が多く来られます。彼らに三割減の話をする、まずゴルフに行けなくなる、飲み屋に行けなくなる、背広が新調できなくなるけど、それぐらいのことは考えてみれば、まあいいか、となる。最後に残るのは子供を大学に行かせることです。東京の大学に子供をやらなくなる、これが一番厳しいと言つて、ところが彼らは口ぐせのように、「我々中小企業の経営者の悩みは、子供が後を継いでくれないことなんです」と話している。自分が断念した高等教育を子供には受けさせたいと思つるのはもつとだが、その結果子供はサラリーマンになつてしまふ。「東京の大学へやるなら後継ぎは諦めなさい、後継ぎが大事なら手元で仕込みなさい」とアドバイスすると、「嫌な先生だ」と言われま

すが、そうした考え方を持てば、自己矛盾に陥らなくて済む。不景気はチャンスかもしれない。答えはいつも目の前にある。江戸時代の日本は、この小さな島の中で、大小三百三十もの独立した藩に分かれ、同時にみな同じ民族であるという意識を持つていました。つまり各藩は独立していると同時に、天皇や將軍を上にした秩序にも服していた。対外的には、江戸幕府開府当時、アジア最強と言つていい軍事力を保持していたときに、あえて鎖国政策を取り、「侵さず侵されず」を実行しました。その結果、平和と繁栄が長く続く幸福な国家を実現した。

これは戦後六十年も基本的には同じ状況です。

- 一、豊かな経済力
- 二、国民の知識水準の高さ



今日は郵送分が550を超えました。区長さんをお願いしている分と合わせて、1,200通近くなるでしょうか。それにしても毎月、力不足の紙面で心苦しい限りです。◆ミツバチは、気温が12度を超えると、巣箱を出て蜜集めをすとか聞いたことがあります。お昼頃、裏の小さな畑の土手の、「ふつつえ」(野生の房州語ですね)の菜種に、ミツバチが沢山来ていました。去年、「すむし」という天敵に見舞われて逃げていった、「お寺のミツバチ」かと期待したのですが、どうやら北国から寒さを避けて来ている西洋ミツバチのようでした。08/03/09 龍渉

◆弥生。軟らかくて暖かい響きのいい言葉です。「いやおい。3月の異称。草木が生い茂ること。」余り当てに出来ない事典だそうです。広辞苑第6版にあります。三寒四温とは言ひ得て妙で、今日は4月ごろの陽気でしたね。◆折角、久しぶりの京都なので二晩ぐらゐは泊まって、お参りしたい所もあつたのですが、この『まんだら通信』は今日までに仕上げないといけないので、おととい行って一晩泊まりのとんぼ返りでした。お蔭で往復約1,500キロ、久しぶりの長距離運転を楽しみました。◆それにしても、昔に較べて道路事情と、車の性能が良くなったこと、驚くばかりです。

余滴

- 三、文化の歴史的伝統の高さ
- 四、切磋琢磨の機会の豊富さ
- 五、商品化するための多種、高度な加工産業の存在

という五つの条件がインフラとして必要だと言います。現在の日本がすべてを兼ね備えていることは分かりますが、江戸時代の日本もすべて満たしていたわけでは

鎖国政策の中で自給自足を実現した経済は、例えば、大阪の「米市場は幕府（政府）の介入などない、売り買いで決まる世界最先端の市場をつくりあげていました。当時の商人たちは市場原理を知っていたのです。寺子屋に象徴される教育システムは、農家の子供にまで浸透していました。伝統は脈々と受け継がれてきたし、各藩が奨励する工芸品も、江戸に上納され切磋琢磨されることによって、必然的に高い技術を持つことになりました。

治安もよく、松尾芭蕉の『おくのほそ道』では、六ヶ月間、二千三百キロを歩く間、一度も追い剥ぎや山賊などに出会っていない。それどころか、農民から借りた馬で目的地に着いたときに、芭蕉は礼金を馬の鞍に結びつけて農夫のところへ一頭で返したなどというエピソードまで残っているほどです。お伊勢参りにしても、農民が自由に旅をできたということも驚きですが、農民にとっては全国各地の産物や農法を学び、種子をたくさん集めてくる、正に遺伝子集めの旅と言う側面もあったわけですね。かように江戸時代には文化創造の基本構造が出来上がっていました。

アジアを席卷する「ドラえもん」

一九九〇年代以降の十年以上もの間、日本は国際金融で惨敗し、また外交、国際政治でも惨敗しました。BIS規制の名の下に、行政主導でバンク・オブ・アメリカの再生のために寄付というかたちで資金を投入したり、ゴールドマン・サックスがおかしくなつたときに住友銀行がその株を買ったり、資金的にもてこ入れして、ずいぶん援助したにもかかわらず、結局資金は回収できなかつた。私にいわせれば、国家的に金融で騙されわけです。

ただここで言う惨敗は、ユダヤ系の経済学の視点で言うものであつて、実は江戸経済学、日本経済学の視点では勝ちに等しい。

イギリスの『エコノミスト』誌の編集長を務めたビル・エモットが書いていますが、日本人はマンガやアニメのキャラクター、例えば「ドラえもん」であれば、アジアの国々に散々無断に真似されて、コピーされて海賊版が横行し、著作権が侵害されているにもかかわらず、怒らない。それどころかそれほど「ドラえもん」を好きになつてくれたこと自体、有り難いことだと言つて済ましている。

こういう精神はアメリカ人には分らない。アメリカだったら必ず裁判を起こし、徹底的に叩き潰すが、そんなアメリカ精神でデイズニー映画はつくられていくから人の心を打たない。要するに、アメリカ精神の根本はカネ儲けしかない、ということ

日本人は、みんな喜んでくれればそれでいいというのが基本にあつて、アニメをつくっている。だから、日本のアニメを見た人はその本質に流れる心情を素直に感じる。人種も民族も超えて、中国でもインドでもマンガでも、若者たちは心の底から、強制でも何でもなく日本が好きになつてしまふ。結果、日本は経済のみならず外交でも防衛でも得をする。総合的究極的には勝ちとなるわけ

「ドラえもん」に影響された中国の若者たちは、「ドラえもん」で表現される暮らしに憧れています。「どこが好きなんだね」と聞くと、「子供でも二階に個室を持つているから、すごい贅沢だ」と言う。

加えて「親が子供につべこべ言わない。宿題しろとしか言わないのがいい」と。だから日本にもものすごく憧れていると言う。

こうした実態を私たち日本人はほとんど知らない。日本の学者や特派員が、海外のインテリばかりと付き合っているから、その国の国民の実像が見えないのです。

シンガポール大学に日本学科があります。三百五十人ほどの学生がいるそうですが、出席率一〇〇%だそうなんです。それだけ若者たちが日本のことを勉強したがつている。勿論日本企業に勤めたいとか、理由は個々に色々あるだろうけれども、何よりも基本的に、日本が好きだという前提がある。

そんな日本人が知らされていない話の世界中にごまんとある。いまだに日本人は嫌われているなんてまことしやかに報道しているマスコミがあることに注意するべきです。私たちは、もつと日本人本来の生き方に自信を持つべきだと思ひます。それには国際的、人間的普遍性があります。

未来を拓く「経世済民」のセンス

もちろん江戸文化のマイナスイメージもありません。軍事力がハードでもソフトでも徹底的に遅れました。

けれども、軍事力が必要とあれば自らつくりだすことができる底力はあつた。というのは、教養ということですが、しかし、忘れるというのにはゼロになることではないんです。後にセンスが残る。江戸文明という閉じられた循環型文明をつくつた日本人の遺伝子が、いまなお体内にも体外にも残つていて、その遺伝子を最大限発揮できるような政治と産業技術

磨けばいいわけです。

そのセンスがあるから、例えば、ブッシュの顔つきが悪くなつたとか、温家宝が、福田（康夫）首相の前で威張つて見せるなんて品性が卑しいね、とかが感じられます。

話は脱線しますが、安倍晋三さんは、一昨年十月、首相就任直後に訪中したとき、温家宝に会つた瞬間に「拉致問題を一所懸命やっているんですが、中国にもありますね」と、いきなり切り込んだんです。その挨拶に温家宝は縮みあがつた。それは、「あります」と答えれば「一緒にやりましょう」となる。「ない」と答えれば嘘つきになる。温家宝はとつさに「まだ詳しい報告は受けてません」と逃げたと言ひます。

このことは直接安倍さんから聞いたことだから間違いのないと思うけれど、温家宝はそのとき、翌日安倍さんが胡錦濤と会つた際、同じように発言されたら、自分が「お前の対日ルートはどうなつていんだ」と叱責される、それは困る、怖いことだと考えたんだと思ひます。結局温家宝は、自民党や外務省の人にその質問はしないようにと工作してあつたのに徒労に終わった。

この一連の流れが分からない人は、外交KYです。空気を読める能力はセンスで、そういうセンスを持った上品で風流な日本の若者がこれまで世界にないものをつくりだす。最初は芸術に出てきます。その象徴がマンガとアニメです。マンガを馬鹿にしてはいけません。

勤勉と創意工夫で何でも最高品質をつくる自分が努力する

他人と協力する

異文化を認めて共存する

はかないものを愛する

自由奔放に表現する

宗教的規則はない

といった日本人の芸術感覚、美的感覚が日本のマンガの底流に流れているんです。人間のあらゆる心情、生老病死、哲学に至るまで自由に表現できる方法、それがマンガの本質と言つていいかもしれせん。アニメ、テレビゲームも本質は同じです。そのマンガが世界中から受け入れられているということ、は、世界中から評価されているということ、喜ばれているということなんです。

それが最終的に自利になる。

その意味で、日本人は世界史上類を見ないほどの「経世済民」の国民と言つても過言ではないんです。民を救うのが済民です。そのために世の中を経営する、それが経世で、政治のことをいい、仏教の教えでは「足を知れ」ということです。「知足」を知らない、自分の欲得しか考えられない人間は無間地獄に落ちるしかない、欲望にまがりがたいという教えです。資本主義の象徴であるアメリカは無間地獄に落ちているのです。（二部省略）

「もう半分」という言葉があります。お酒を大好きな人が、ビンに残つたお酒を見て「もう半分しか残っていない」と思つか「まだ、半分も残っているじゃないか」と思つか、受け取り方は正反対ですがどちらの間違ひではない、というお話ですね。

占領軍の政策によつて、『日本は悪かつた』という教育を徹底的に受けました。当時の国民は、歴史始まって以来の大敗北ですっかり腰を抜かしました。でも、マッカーサーがいなくなればまた以前の日本に戻れると、そう思つた人は多かつた筈です。だって、何千年続いた文化・伝統と言つものは、そう簡単に廃れるものではないから。

ところが無一物になつた日本は、食つためには歯を食いしばつて働かなければなりません。つまり『美しい日本』を忘れてしまふほど、働き続けた。氣付いて見回して見たらギスギスした自己中心の人が、やたらに多くなつていた。

親殺し、子殺し、賞味期限のラベルの張り替え、いじめ、幼児がため池に落ちたのは、柵を作らなかつたお役所の責任……。でも、本来の日本って違つていたんじゃないの、というお話も結構あるので、それをお知らせしたいと思つたのです。

というわけで、今月も雑誌『MOKU』から日下公人さんの記事を使わせてもらいました。月に五、六冊の雑誌を読んでいます。この雑誌が地味ながら一番真面目でけれども、味がなく、わかりやすい記事が多いと思つて、お勧めしています。

年間購読料十二冊で一〇、二〇〇円です。是非、お寺にお問い合わせ下さい。